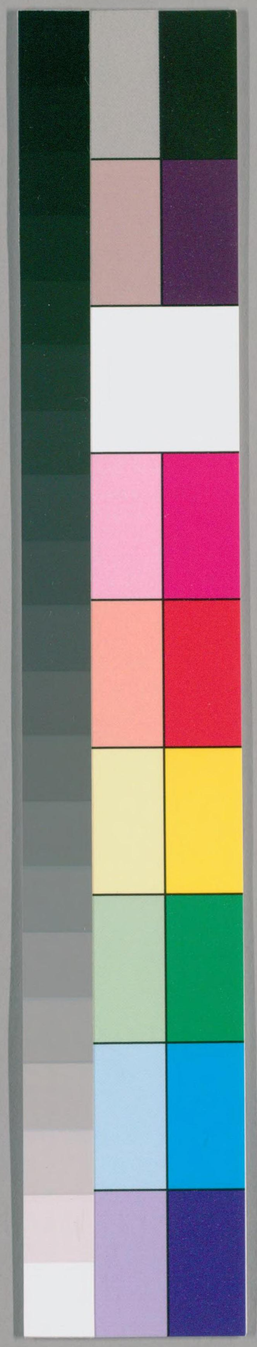
830
30
107



国立国会図書館　　タイトル『宇津保物語 30巻』　請求記号 830-107

ガラス使用

うつほ物語

俊蔭 一

今板本十六の巻ノ一

古本一の巻

830
107

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

元亨乙丑春九条感遊記之　東大寺要録

叙実忠良辨之徳也韋神遊都率内宮見四
十九重摩尼殿有一所榜曰常念観音院是
其修法僧心甚信慕便乞聖衆而得軌儀後
欲修法而無尊像常精念祈求一日臨摂州難
波浦忽見閼伽器浮浪来近視則十一面大悲像
在于器也忠喜而取之銅像也其長七寸時如
人属朝廷因之執奏建羂索院安之其寺毎
年二月朝対像修懺事軌者二七日始天平勝宝
四年至大同四年五十八年未嘗有闕修號修二
月法至今不絶諸寺多則之乎

巻二　刹那　楞伽云〻〻時不住名為〻〻　倶舎云壮
士ノ一弾指ノ頃六十五ノ〻〻アリ　仁王経云一念ノ中ニ有九十〻〻一〻〻ニ
経九百生滅　瞻蔔翻為一念　日蔵云我今復説〻〻之数
一千六百〻〻名一ノ迦羅ノ　六十ノ迦羅名模呼律多ノ　三十ノ模呼
律多ヲ為二日夜ト云〻

一　阿修羅　旧翻ニ無端正　男ハ醜ク女ハ端正ナリ　新ニ翻非天ト云〻　中略

〻　三昧　此云調直定　又云正定　亦云正受ト云〻　遠法師
云夫称〻〻者何ゾ　専思寂想之謂也ト云〻

三　閻浮提　訛也云　剡浮　此云勝金　大論云〻〻ハ樹名ナリト云〻　提名ヲ為
洲　此洲ノ上有此樹林ト云〻　以〻〻樹ノ故ニ名為〻〻洲ト云〻　西域記云南
贍部洲　旧曰〻〻〻〻洲ト云〻

一　阿弥陀　清浄平等覚経ニ翻シテ無量清浄仏　無量寿経ニハ
翻シテ無量寿仏ト云〻

般若　法界次第ニ云　秦言ニ智慧ト云〻　六

二　忉利　応法師云梵音訛略　正言ニハ多羅夜登陵舎　此云
三十三天ト云〻

〻　兜率陀　此云妙足　新ニハ云覩史陀　此云知足ト云〻

〻　提婆　此云天　法華疏ニ云〻　若華厳ノ上品十善乃生欲界ノ一六天王天ニ九
忉利天ニ若修中品ノ十善生三十三天　夜摩天以下五化楽天六他化自在天ト云〻

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用　挟み込み物

○波斯

玄応音義廿四 波剌私 亦云波斯ノ国名也臨近西海
最饒其宝ニ諸国商人皆取其貨ヲ云

西域記十一云 波剌斯国人性躁暴ニ俗無礼義ニ无学芸ヲ多
工伎ニ婚姻雑乱ス死多棄屍ヲ云

倶舎頌疏第十四云 ーーー作如是説ニ父母老病 殺得勝利
免田苦ノ故 又云 謂於母等ニ行非梵行ノト

梵語雑名 作波囉悉ニ

文殊讃　金毛師子微放珠光云々

讃ハ白居易云、又云　西天仏陀波利三蔵　唐高宗永隆中

五臺山来　誦此讃云々

覩史内院　弥勒下生経　上生経　弥勒来時経　心地観経等也

處於第四覩率天　四十九重如意殿云々

○内院四十九院ハ菩薩ノ所居浄土也　外院ハ欲界ノ中四天覩史院天也

天衆ノ所居也

○四教儀集註　十住心論第五師

○元禄秋書　東大寺宗恵伝

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用　挟み込み物

俊蔭 上

明 古 田 羽 埼 古 一本
朱 墨 藍 黄 墨
明 コ タ ハ 丑 三

古写一本
華陽本
與板本
田中本之一 白本
田中本之二 紺本

△ イ イ エ ヨ △ △

与板本 新吳御蔵 十六巻 二十本

田中
道允
手校
本云
表帋裏ニ紺紙ヲ貼セリ

下本
俊景上
白本 才一上
紺本 才一上
陽本 才一上

墨 朱

藍字頭書 田中本道允説
符頭書 同本紺紙之説

○万葉集巻十九
為寿左大臣橘卿預作歌 古昔爾君之三代経仕家利吾大王波七世申祢

清原大君

式部大輔左大弁かけて清原の姓賜はる王ありけりと云ことゝ
皇女腹に男子一人まうけさせ給へり さてこの俊蔭の父を王とも ありけむ 俊蔭て
皇女腹ニ男子一人をうまれ給ふ 男子ハ即俊蔭之 皇女ハ嵯峨院の御妹にて女御殿なりけり
そのころの帝の御時の皇女を娶りて 俊蔭の母とあひ給ひし時
いとかしこく ありけり
さとき 崇神紀ニ聡明叡智 垂仁紀ニ聡達
あやしき あやしきは神異恠妙吾所ニ測
とうつくしくありけれは 年齢不相應之
高麗人の 桐壺 其ころこまうとのまゐれるなかにかしこき 鴻臚館につかはし
[illegible]
いとおもしろくかしこき子のゆゑと見えて 異なる
後拾遺
男ありけり 元服 加冠 拾遺上 叙爵

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』　請求記号 830-107

ガラス使用

4.7.20 購求

俊蔭 上

明 古 田 羽 埼 古一
朱 墨 藍 黄 墨

明 ユ タ ハ ホ ヨ

一本
古写一本
華陽本
與板本
田中本之一 白本
田中本之二 紺本

イ イ エ ヨ △ △

与板本、新発御蔵十六巻二十本 巻々ノ湲次ハ別ニ記ス

田中
道丸
手校
本云
表帋裏
二細紙ヲ
記セり

下本
俊景上
白本 第一上
紺本 第一上
陽本 第一上

朱 墨

藍字 頭番 田中本道丸読
又 符 頭層 同本黏紙之説

此本弘化の比市中にて買得田中道麿か自校本也

○琴の名

○万葉集巻十九
（此哥葛城王橘ノ姓ヲ賜リテ諸兄ト改メ玉ヒシヨリ八十六年後也）
為寿左大臣橘卿預作歌 古昔爾君之三代経仕家利吾
（天平勝宝三年ニ三年ヲ加ヘタリ）

式部大輔左大弁かけて清原の姓賜はる王ありけり

皇女腹に男子一人

大正 4. 7. 20 購求

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

俊蔭 上

士 夂 本

明 古 田 羽 埼 古
朱 墨 蔭 黄 墨

明 ヨ 夂 八 ホ ヨ

一本 イ
古写一本 イ
華陽本 エ
與板本 ヨ
田中本之一 △ 白本
田中本之二 △ 紺本

口演目録

与板本 新奥御蔵 十六巻 二十本 ……

桜町殿ニ作ル 東 ……

田中
透九
手校
本云
表紙ニ紺紙ヲ表紙ニ紺紙ヲ記セリ

下本
俊景 上
白本 ヲ一上
紺本 ヲ一上
陽本 ヲ一上

蓋字
又 符號

校合凡例
朱 にて志るしたるハ白本ニ本かき事の印
又凡テ 朱 にて傍にも記したるハ白本の點也
墨にて志るしたるハ紺本の印
又凡テも墨にて傍に記したるハ紺本の點也
。。。 紺本ト今本ト同キ印
紺本同キ印
青ハ道九サカシラ

イ 華陽本 イ古写

嵯峨院

大輔左大辨
……王その比の皇……

むかし式部大輔左大弁かけて清原の大君ありけり
御子腹に男子一人もたり……

諸王賜姓
続後紀承和元年二月甲午今夜三品明日香親王薨云々 先太上天皇在祚時
親王上表白諸陰親王号同之諸臣不見許更祈所生男女賜朝臣姓感其懇誠
乃聴之孫王賜姓從此競效之

持而有引アヲ又ハ別トナレリ

……よくかしこし。七歳になる年、父の高麗人
にあふに、此子ちゝをもどきて、高麗人と文をつくりかはしければ
おほやけきこしめして、あやしうめづらしき事なり、いかでこゝろみむ
とおぼすほどに、十二歳にてかうぶりしつ……

ロ父カ高麗人ニコタフルヲ此子カモトカモク思ヒテ父ニカハルナリ

ことゝ

巻十六

大輔左大弁

むかし式部大輔左大弁かけて清原の大君ありけり

御子ばらにをとこ子一人もたり。その子心のさときことかぎりなし

父母いとあやしき子なりいかにならむとて

ふみもよませずいひをしふる事もなくておほしたつるに

としにもにずたけたかく心かしこし。七歳になる年父か高麗人

にあふに此七歳なる子ちゝをもどきて高麗人と

ふみをつくりかはしければおほやけきこしめして

あやしうめづらしきことなりいかでこゝろみむと

おぼすほどに十二歳にてかうぶりしつ

[illegible]

俊蔭 上

明 古 田 羽 埼 古

一本

古写一本

華陽本

與板本

田中本之一 白本

田中本之二 紺本

イ イ エ ヨ △ △

校合凡例

本 俊景 上

白本 第一上

紺本 第一上

陽本 第一上

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

桂林遺芳抄云

一補文章得業生事 文章生者進士也 此事学生賜一官之義也 宣下後云文章得業生也
或号秀才或称茂才也 但位署只文章得業生 上古者通一経之時被登用補秀才也今者翰林学士以簡試
分數狀文章博士之挙也仍云儒挙也云〻 文章者四六也云〻

一文章生後補秀才例 四曹始祖清〻 御傳云〻 清ー年少時渉経史延ノ三年奉試
補文章生学業優長被奉秀才十七年對策登科云〻 又文章生後給料秀
才例 菅原茂長〻御傳云〻 正応三年三月廿八日文章生于時七歳 同四年二月七日給学
問料 穀倉院 同六年二月十三日補秀才永仁二年任因幡少掾同三年二月十二日
對策同十九日叙爵 于時俊長 云〻

或記云聖武天皇神亀年中始進士試 進士及第例 兼和六年春五星差連珠諸及第
三人 三月廿日判少輔藤原氏宗朝臣 孫王茂世王 桓武御後仲野親王男 三原永道文長河

一題事 口傳抄云試詩之時有屋題実題屋題ト八風月題也実題ト八史書文題也云〻
一雲客勤問頭例 六位例 試衆 文章得業生藤原朝臣春海 問頭 正六位上行少内
記三善清行 又試衆 文章生弓削以言 問頭 正六位上行少内記藤原临良 已上文
粹文 五位例 云〻 四位例云〻 又長和五年十二月廿一日宣旨 試衆 文章得業
生藤原家経 問頭 従四位上文章博士大江通直 云〻

一題者事 彼贈左府記云儒中可然人躰ニ申試也式アノ輔先ハ大卿也有賢者
才大〻等有例宣下ニハアラス只兼テ直申定ム省門ニテ当坐ニ題者題ヲ書テ授
問頭〻〻給試衆然而兼日ニ問頭題ヲモ封テ策文ヲ書題者問頭兼勤ル例アリ云〻
題書様 強紙一枚書也 一策方略文二条 挙賢以才 為政以徳 云〻 策秀才文二条
幼聡 高福 云〻

一策文事 又贈左府記云本儀ハ問ハ問頭儒カク対ハ試衆カク題ハ題者コレヲ出
ス近来ハ問答題皆問頭沙汰也云〻
判次才 評定文 式ア省 評定 文章生正六位上藤原朝臣義資對策文事
合貳条 挙賢以才 為政以徳 正二位行式ア大輔菅原朝臣秀長問 今評件策
挙賢以良才其義雖不叵細論政以明徳彼趣粗有博聞已奉桂林折枝之試頗優
藤家累世之名因准格條處于丁科
云〻 下略

秀才 文選注云秀才者言其人如草木之發華秀見者愛之
校書殿 拾芥抄 月華門北 七間二面

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

下文五オ うつほへをつたへてあそきころひをも
竹取 中納言ひとつひとへあそせてものひのりを
孟子 梁惠王下

あらの風 難風逆風ヲ云次ニモあらの風おそいあるはあひてトアルヲ思ヘハ逆風大波ニテ我ニ仇ナフ悪風ヲ仇敵ニタトヘテ云ナリあらき波ト云ヒとらみそていあるれトイヘルモコノ意ニテ化ノことトイヘルニハアラス 在満説ニ真本ニアリ

△白き馬ト餌本ス

よおひみんことのうされみちまいそくなりぢゝそくこと
しうけるゝ山の鳥のこゑして三人の外にひとつ
ぐんて、ふることを切りてなにそくちて、つるまふまはぬらぬ
ぬかりあらにつてもむもろあらんなりさの風吹きく
ころあら舟。ふとの川に世をあされぬあさくのしなつ
ぬりうりんとしなり舟を波斬国まをまつれぬを
の国乃するさんしうもとして、たまりまつりを
よまうことるすりとて七策くりとうくきつるまり
為にな禁るひとつましまへ観音の本誓をおんしそ
まつ□よとりあるさ地ふん□みてぬすきさん、らくそれ
うちあそれむまうすてきてらひまきていふるり。

あそとる正月七日ノ青馬節會ヲ後ニハ白馬ノ節會ト云テスサハチ白馬ヲ引カルレハ青キヲハ白キトカヨハシテ云ユヱアルナルヘシ諸本ミナ白馬トカケリ

觀音の本誓
法華経普門品第廿五巻
若有百千万億衆生為求金銀瑠璃硨磲碼碯珊瑚琥珀真珠等宝入於大海假使黒風吹其船舫飄墮羅刹鬼国其中若有乃至一人称観世音菩薩名者是諸人等皆得解脱羅刹之難以是因縁名観世音カクノゴトキノ本誓アレバ此トキ俊蔭朝臣モ念誦アリシ功カニヨリテソノ難ヲノガレタマヒシヲ云

ふと
下文五十四ウ東枝のふとをふとあるしれそを
竹取 あらのものを□ハ
説あらハふとにつりても
ふと ○竹取下三 ふと□あひをしもひなハ
ふとうきりかされハ□□ ○大和百六 いと□□子を□□ハ□子どもふる
此□源氏□□なとまいと□き□今俗まいふをはし
文迁注ニ不圖不意也とあるかりて不圖の字音とするハひかこと

むしりあらしひあしゆくしよろはしつまとよるとれ
りみわりん。ふところひよの世ろぐとしひよそびてさらく
もとしさ禁めをしらんのうあまよ。よらしれりたとむろて
三人風。ふらしひ井て琴をあさふおそふとろわよ知ろ
しきふく。むまわこうえうきぬとしうあまりやしれも
とんしまそう。三人の人あらひ居て琴ひきゐそひある

○三人のうち 三人の人をあまさまりし 下文十三ウ 七人の人をあわねしそこそ 竹取 二千人の人を締め家にうつりんなとあり

日本の王の使異本ニ國字アルヨシトス次下ニモ日本國皇の使トアルニテシルシ一ニ

又頌 呉音 [illegible]

俊蔭十七歳の春より [illegible] 三十九 [illegible]

[illegible]

く、琴作りける人を木のもとにおいて、ひきさらふ音聞し
て、おもしろくに三年といふにこの琴の声して年月ゆく
ほどに、この山のひゞきのこゑはひゞきあふくらゐ
むかしよりあつらふの声この川の岨にそひてたちそへてくれ
なめらかにて山と又地一ツのところよりかけて
海などをかいなきよごとの琴のよはひとしもあまたきこえもたられ
いたりけり。このすまひにあるじのいかにいなしくとし
一ふくれつゝうえむと思ひいつゝ、ふしの声三人の人きは
いま海をあひくゞるの琴のこゑあつうてはとわれあしと
いてきてこそれらうしとうけて、海河くねはれども
こゑをくずそのよしられぬ。おもしろきをしられぬ。三年

かなまり 和名抄 金鋺 日本霊異記云 [illegible]

きりこつる 桐木を破折て [illegible] 木造る也

とらふしの声、おほかたこゝのよのかりて、とめらう
せいらてさえりつゝそうしき山をうしろにきゝと
しらあうさせうさはしろう、をとつゝかり
ようもくちへ其の山よりてこえさをは千丈の
谷の底に根をさして、末は空につきて、えたいと
なりの国にさせる桐の木をたふしてわりこ川
る斧の頭のほとと、これにいつきとそうとしたる
はずさくのほとりの眼と見えつるいとくまうめれでい
みしき女をなみてもむかしとみとめくゝらう也と
流くへ木をとりこるそれをあつさ此うさとみゝ
けり。秋風はこの山よりおりかりつゝとおもひわりのしるし

釈氏要覧中脩羅趣又云阿須倫、海龍王経此云無善神、大毗婆沙論云阿素洛此云非天又素洛是端正義阿是非義謂身形不端正故云云 翻訳名義抄巻二 阿脩羅旧翻無端正男醜女端正新翻非天云云

うれへ給ひて、あしゆらの中よりあらはれて

みかどの御わかれ、いかにかなしからん、この人なこそ

しろしめす日本國皇のつかひ清原のとしかげ也

これよりさき川をわたりてぬるに、三とせまなりぬけふをまち

てなんこの山を出つるにくるしみ

阿修羅

真云日本より千二既文アル

古恋二　貫之

天寳遺事　楊貴妃初来恩召与父母相別泣涕登車時天寒涙結為紅氷

きたなきをわくらむとて、ふかきはやしのかげにかくれおはら
くていはく、日本國やまとの川ちかきところにはべる人
なんちくさしはべりしかと、一生ひとりごにはべりし親の
やのうちに慈悲のいとふかくして、をとうとのまゐる
まかせぬことはふかうてはなれまゐらせぬ、おやのちから
心のうちにとまりしてのがれがたく、あんぢ不孝のみなる
はかやよきあまたのけさうせしを、孝のみちにいはさ
れはりのあはれつのおやむすびとの縁さゝるを知りて
とあるさま風情かはりてみなよあはれとなりしを
かくして一人とゞまりぬ、世のならひ、こゝろしらで
まかりぬ、あはれ不孝の人さへこれにつきぬまかりし

めのたふるしまれるさつらしを給はりて、としあるらむ
とありちくてのこの數をさうせて、わたのしめいとお
なすむとしふれは、おそくりやすまかくりはいのそ
いたくあんちかなしみの命をとくめんとも、この
天女一人のこのにくにそのおいせのちらく佛になり
みこくろかりて三年ありたゆ
天女音聲楽をしてうへてまかりさてとよかりたる天
女のにて海つくしは河海のりの方にのつかなすくにかれ
しにさしいる秋のさへこそはその
三とこしにかしもつくさのおもかはいに三寳
よりとめぐりつとおもつて切利天にかくれて

天人影向ノ下
○報恩經第四十八○洞冥記巻三○政事要略巻廿七○本朝文粹巻二○江談抄第十○江次第

古事記上卅六ウ　天津国玉神之子天若日子
紀神代下一ウ　天国玉之天稚彦是壮士也

古今序注

三寳　謂仏法僧也

真名日本より 下二般文アルべし

古恋二 貫之
しら玉と見えし涙も年ふればからくれなゐにうつろひにけり

天寶遺事 楊貴妃 初承恩召与父母相別 泣涕登車時天寒涙結為紅氷云

きたならをわたくむとて、よそほしは、やしきあかしおう
くていそく、日本よりやまとさしわたるかはかいすれん
ふたくへちくとくゝはゝひしとして、一生ひとりあるせ、はゝ
やのゝりとのあつく慈悲のあふるをしとなく、あるしの
おかせぬりしこゝろふかくて、まことにおやのちゝを
ゑのあとさをあはしての給りく、なんぢ不孝のみなり
はかやよあるらけきわかせよ孝のみちうへいおもき
ぬありもののあさきりのあかひむら人との給ふさうをゆくし
うあれさ風ありいはうるみよあいくともうを
かりして、一人あらぬせりはたしるしとしてあそくしく
まりぬ。ふうれぬ不孝の人こそ、これうこめでぬるまむ

めよ、たふとうとしありくさうらひをぬらしてよしあるを
きをうちちりて、くにの数をさうせて、おとのむくいとお
なまむとりをあそれよ、おもひやりをくまいるそて
いそくなんちいのちの命をとゞめむとも、この
あめ一人をくりそのたいせのちゝを佛になり
給ひ日、あめわかみこくだりまして、三年あまりたま
天女音楽をしてくだりて、木うゑさせてそのうちに
女をはなちて、海の底の方初めのつゞきすらしたまひ
むしたに山よりさりしにたる枯まさのをそ
とほく、たえて、三るさうそのうちは、三寶
よりとゝめうそそれて、忉利天よりてこえ

神代ノ天稚彦ヲカリテ名ヅケタルト云説アリ誤ナリ天稚彦ハ逆臣ナリイカデカ用フベキ古今序注ニアメワカミコト有
口楽家ニテオムカクトイヒナラハセリ
佛法僧ノ三ツヲ三寶ト云

古今序注 下てる姫
法花経 大荘厳三千界

欲界ニ此有六天謂四王忉利夜摩兜率化楽他化自在
翻訳名義抄巻二忉利応法師云梵音訛略正言多羅夜登陵舎此云三十三
嵌　天あまの領ある所なるをあやしき人のゆくべき所をかりそめの人なにかあそびありく
同　心を
○ふねに乗ルヲ　秡摺本ニ
なんち一人あり(?)
あり海一…

中のきよらなることは、…の世やまむくひしりのきよらなるは、
…しく…との…なり。阿修羅は
山の…花その、秋はもみぢの林よ
天女くだりて…
…んやそこだくの年月な
て過ぎし…あさむあしき
さ海の…つゝまをいさ…なめの一…とし
…なか一…とし
…むかへ…て車の
のこる…くつらし
のみ…と、阿修羅よ…して

秡摺本　施れトス
秘氏所覧中
衆生ニ云祐法師云衆共生世故名衆生ト
この木みよ
一説ニ宝物の小槌と云
宝物集ニ十オ廿八人ノ宝ニハ打出ノ小槌ト云物コソ能宝ニテ侍リケレ広野ニ出テ居能カラン家ヤ面白カラン妻男ヤ遣ヒ能カラン従者馬牛食物衣物ナント心ニ任セテ打出シテ有シコソ人ノ物ヲモ不取シテ能侍ヘケレト云
ニ云〻
平家六廿三オ

…三…の木の…
…施を…
…さ…そ…を…
…女のゆくすゑの…
とひ…これの…
…の…一…
…一万恒河沙の…
…なむ…
…
…阿修羅…三千…
の…くて…天女くだりて

和名抄ニ

まして、うるしぬり、たなばたをよりすげさせてのぼ
りぬ。かくて、このことをしらべて、やうやうあこのこゑや
しらしめしけん、かくまうでくる。せんにんの林よりうつろふく。
このことのねをとんさんといひて、ころゆくよ、ゆうしかせ
いくほどそ、三十のことをおくらきこそ、嵩ねそみるよ
二十八人の数あるほど、わたらひと二よはしまするはむく
つま地はまさけうくすく山ひろよゆそりめくしう
あさうくもそしさるやしに、ひとり猫くとして尽
仏あのくはりくこたてのおふよ三年とふかへし尽
この山よりめでよはらす花ぞそのようくしく
とあくへそれく、はわきさかる花のえのうかしやどり

天人影向 モノアラカヒニアリ

て、織女のことゝもなれて、よしありつつ、数多あるも
ある二つはうちあはせてみつ。春の日のどかなるに山をみ
まはしそそんみゆるに林をみまはしてのめぐりて、花ぞ
ぬをうれさむにおもしろくてる日のひかりの時おもなるに、
このことをひきそて、数ありそてあそぶふるにれ
よ夢の手して、ひとさへの雲よのまわる。天人七人のる
まで、くるつとおかしひありみて、あわゐに天人
花のふえおりねての緒衣あんその人の春は花ぞ
いりみそとみなくて、をかしに舞ふをみかけれて、
しのよつぬまたれすかきまゆうするもこれなら
来ま、陀羅尼のもりうくし来ゑてきぬまりしへわとの

無量寿経上云
仏告阿難法蔵菩薩
今已成仏現在西方去此
十万億刹其仏世界
名曰安楽云々

まふらしうきゝの木たてりわまる花せるからく紅の
うへは緒雨ともおもしくてあめやうかけ雨ともあしろ
ひら々舞すみをりまと待るところへ天女ひのなくさ
らいきれうしうやましか雨よる人まのれえもみ緒まりあり
天のせにてきてあめのおちさにとゝひきてそゝよつ
へきんよるむのせる我をむらしいさうなる在はう
しるそ我よりう西佛の比ぬよりいまかうたりけり
くきりてせとせあてとそとよ我子七人と侍らふさ
此の人は極楽浄土の楽よりこと緒のさあかせて伝
ところへいまりそこよまうりてきの人の多後にき
まりて日本国へは帰りまへとの三十九とし中にゆ

なん風と云風は
その名えみゆ
まきかしいし風は
波斯国よりて
名つけし歟

釈氏要覧下
娑婆世界正云索訶又
自誓三昧経云沙訶漢言
忍或云堪忍謂此土
剛強難忍故即事立名
也

浪さらうさせは我かろくは一とかるん風とうく。ひと
川とかうし風よりくこの木この川のこと我はゝ山の人
のまへへそきうのこ在て坐てまさ人ほきうるそあと
の緒とれあうる川のことれまもん雨よは娑婆世界也
ともあるもとようへんとの緒にとうゆ亜人
の緒よまさりひく花その木の高をゆしてゆきゝは
此あいするの川あその阿よう孔雀のとをもてその川
とまうしつてとそはまへの比風とらるきれ
みしへゆけは。岩まての岩よう龍いつくしとてこゝ川
こゝは旋風して川それうのめしたる我ゆけはさう
し我山せありそのの山より仙人あそて川それより

大蔵法数二
〔一花〕出梵網経 経云 我今盧舎那方坐蓮華臺 周市千華上復現千釈迦 一花百億国一国一釈迦
仏名謂也 …… 蓮華者蓮華世界也以其形似蓮華故 …… 華蔵世界之中央也 華厳経云 風輪持香海 香海出蓮華 蓮華持世界 是也

さつく所まてさへ出きたるく
ちかしくゆけは七の山に
あるつの人まていひりゝくまとひ所まいてぬ
見れはせむたんの木の下に林
、とつく人年三十すくりゝ
ぬかつく。山のあるしおもれよれ
むその人をとりあけて清家
よとしき所後のつくることはあるくのさかいをし
はするむ。この花よ山のわうしゐうれ蓮花
そのかとのうゆやれゆく給所ゝい日ひのみとをこそ
よまりとさせ仏のゆかし給へんよりもたりしかく

貫之集 …… 土左日記 正月七日条 …… 此物語大納言 ……

そ。見ゑのかきよるく、このうしたるとも給ふと
しるくあめるをのるとらしくやらされけ
れ此あきしこくとかれ。花
てくと書はあらそてうれ
しひ給て、とりあてとつく給給て、あまれよりふ山よ
へ給へと給はそれ山のあるしめくしう給。あつうう
とのさこうし給、あやしう蓮花のあれはのよりと
いかへのまくつまへりくの花蓮し、めりきもちへさしてへ
しさよるむおなくまいつはるるのまへあるしあはれ
まて三人つまて三といふ山に入給そこみとあなし
しと此給く四人つ見て四といふ山に入給そこと見ると

国立国会図書館 タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

都率天ハ欲界ノ第四ノ天ナリ
翻訳名義集巻二 兜率陀此云妙足新云覩史陀此云知足
竹取 かくや姫ハつきのみやこの人なりけれハ

なるゝ花そのすゝとゝう番給ふれいかやの山あらゝ乃
くらかしふに娑婆世界の人なりとも花なれとも七
いめんすらそこれ経八を一ゝくしくて七日七夜
つくまこの紛ゝき仏のはやゆらくとこう聞は佛文
殊よの給ふゝなり条娑婆世界より西よこゝと
の人かうゝし

翻訳名義集巻二 刹那 楞伽云刹那時不住名為刹那倶舎云壮士一弾指頃六十五刹那 仁王云一念中有九十刹那一刹那経九百生滅 曇翻為一念 日蔵云我今復説刹那之数一千六百刹那名一迦羅 六十迦羅名一摸呼律多 三十摸呼律多為一日夜云

りとみゝり極けとの給
ゐのあをさとよいてうく
ふくなるむしその人そこと乃給とれは七人の
人られ抱してゆさく、祇いむりし散卒天の肉院の
ゐせあらいさくりあるをとうきて忉利天の天女を
えらくしてこの世界ゟりしまれく、七人のとも御みし

阿弥陀三昧ハ弥陀の名号を一心不乱ニ唱へ七日七夜の或通念…仏とおもふ

よ色海をかりくこすいみつましかゝ色しゝあゝおそゝちふ
さのゝよ仏のよるをそ、まつれたる人のうましきにたるく
れともかうなるゝ給ひてうす給ふとやりよ、文殊かう
てゆるゆへ給ひしをこに仏文殊を別きつまて雲でおり
よのりてまうゝ給ふとれはこの山川うるのくらをに
山花ゆをらうくてゑつをそて、くもの花風の聲あゝりて
芸の花枝乃すみちうをさけらをてさ乃わうし枝ゆうたにおそ
ひん、仏らいをくあそい海うれ乃ておれをうらきて給て
あるけら花蓮よのりて、花の人よおまれ給くえあそい
を経くよあいせて七日七夜念し
あうかれくの給いて、すむちうゝい

翻訳名義集巻一 阿弥陀 清浄平等覚経 無量清浄仏 無量寿経 翻無量寿仏 云々 同四 三昧 此云調直定 又云正定 亦云正受 云々 遠法師云 夫称三昧者何 専思寂想之謂也云々

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

翻訳名義集巻二
究牟陀此云地足 新云
覩史陀此云知足
阿弥陀三昧ハ弥陀の

なるべき花そのすゝらとぶら給ひければ、あやのはおそろしう
くうびしふだに娑婆世界の人のかうよる所なれども、そ
いめんすること、これ〔経〕八を一つりくもくて七日七夜
かくよこのかきさ仏のれいまゆうくここ事ゆすよ仏文
殊よの給ひくぶわなり来娑婆世界より面よて
の人ひとくし来れくるとるすりとみぐり称けよの給
ひしに文殊獅子よのりて刹那のあそくさよいそうく
とい給ひく海をつむそのへときとい給ふ人七人の
人をれ〔れ〕抱してやさく我いむりし都率天の内院の
衣生をかりいきくりあるとそうしきて忉利天の天女を
ぬくらしてこの世界りしまれく七人のさも路あし所

よを海をかゝこすゐみちましわたるまし、さつあるそちふ
きのかよふ所よりそこまうれたる人のまうしさにたる
れともかうはしさいてうる給ひけれは、文殊かう
て仏よ申給ひしかは、仏文殊をかきつれて雲に乗
よのりてまうて給ひしかは、この山川つるのくちきよ
山とゆをうらん定かくそて、くさの葉風の声なりて
芸の花散りみちて、きこえけるこれはうたかへにあそ
ひ人ひらいとくあそひ海をみれて仏まうり給て
をるいう孔雀よのりて花のうへよあそひ給うれあそひ
人くは孫陀三昧と説くよあいせて七日七夜念し
ませかうと給ふ仏あらわれての給ひて、すむちとい

ちん然のむくいハ志然のむくいの誤なり自然報に依て人身を受し也

大尊般那

けうしとかうくどりしいわさうゝしふもちて兜率
天の人とうまれたりしに、いささかあやまちして、自然のむく
いによりて、らくどの衆生となりくだりし世のかうやく
ほろびのうちふさうこの日の本の衆生は世くよ
人の身をうくつきものなあくはせの教いハうふとい
つはりの世に、にんよくのつよかるしところ。されハ輪廻
しうりし人かうに八生やうり二にんくらるよあく
ゐ八生やうるくしその母うくさ衆
うくつさこ人ぬすきハそてもくしく人か
し仙人あうきその仙人礼しこと
かりを申ちて、よかろひくさ終くの衆生

拾衣　大僧正行基
法花経を我えし
こいなき木こらな
つとるらみつゝへ
てえし
法華提婆品

ちくにせめし時、かりさその時に仙人値遇
劫の衆生ようてを施して、尊勝陀羅尼をすゝむ三
昧りをなひつゝあて七年ありきそのを終り。
日本の衆生三年ゝ法くしそこその仙人よ多つきよる
よみをし、先ごくの輪よ輪廻生死のつきおろしくて
人の身をえくるなり。尊勝陀羅尼を念しくてせる
人よ供養しくるあをいさもかきく人の身をとうせんこ
といふことなくも、いさとの山よへく、仏菩薩に縁を
ろうし来たい邪見のもちらに忍辱の人をつらとさ
ひゆくよ、その山乃七人のこまろごうをむろかして、天
よまかへるなし。日本の衆生この国ねよせてせくに

たいしつとおかくくどりしはわさりるらしふゆらて釈迦
天の人とうまれかはさいさわきうらしせん自然衣のあく
いよいよ国土の衆生よなかりふくらゆ。劫のこうやうく
ほろびのうちゆかうこの日の本乃衆生はいきて世く
人の身とうくつきもののまあく衣せの氣はいゝふとい
へいゆんの世よいんよくのつきえらるまし。されは輪廻
しよう一人かうに八生やさり二よ人かくさよきめく
なに八生やよるへし。その氣しるへきてく人ひとのとせ
うくつきくあすし。それはまて。ひとしくてそいむまとつふ
し仙人おりき。その仙人は施しことは貪欲邪見
おりきあまてそまかりかくにまなくのまとさやうち去して人

やくにたゝしめし時。ありき。そのときに。此仙人万個
衆の衆生よらくを施して。菩勝陀羅尼をせむ三
昧うしとなひつゝあて七年ありきそのときに。
日本の衆生三年に流くしよそての仙人ほまつく多
らみをし。衆ぞくの氣よ。輪廻生死のつみおろほして。
人の身をえてるなり。菩勝陀羅尼を念じしてゆる
人と供養しこる功徳いよいよもまさ人の身とうまれこ
とといふことといへとも。いまこの山よくく仏菩薩流とを
ろし。懈怠邪見のともうくに忍辱の心とせしさし
ひろゆへよ。この山乃七人のこゝろざしをわろかして天
よまりへるへし。日本の衆生との国桶よ生まく世くに

ちえん許のむくいハ、忘
祢んのむくいの誤な
る。一自然に報に依て
人身をうくしも

大尊般那

拾衣 大僧正行基
法花経を我えし
ことなき木こるな
つこうみつのへ
てえたし
法華提婆品

（竹取 日の釈の人ちうまるも）

大蔵法数一云
即邪見世云
十六懈怠
翻若六十
所貪丈境
男子二
偏一切

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

いにしへもなくなりにしかはおもはさりしもなりて犯罪
天人のみをこうしゆれたるさ、いささかなりしを自然のむく
いよ〳〵この衆生よかたりふてうら。悲のこるやうく
浄土のしたかふてこの日の本の衆生は、生まる世によ
人の身をうくるものにあらす。悲の報いいふとい
ふ。中にもこの世にようくのつみをつくる。しかれは輪廻
しかも一人かうに八生やうしかを二千人かうてよなく
は八生やよるへし。その所にうまれ〳〵人ひとつのえと
くへつきこゝにありきはまて、むくいいたるもとのへ
し仙人ありき。その仙人の施しとは、苦慳貪邪見
なりの虫にて、悪行ぬしむくりやうく衆生あらく人

くにゝ有し時。ありきその時に、此仙人、万恒河
沙の衆生よくこれを施して、尊勝陀羅尼をせむ三
時よりとなむつとめて七年ありきそのときより
日本の衆生三年あひたしそのくこの仙人はすまゐも
かみをくしてぬくひの報にて輪廻生死のつみおほくして
人の身をえてうまれ。尊勝陀羅尼を守りしてたる
べし。修業しろ。物のいさしもこゝに人の身をうまれこ
とかゝるともいふもこの山にてく仏菩薩の蔭をうさ
あし、あたい邪見のものにし忍辱のらをきこし
かうゆる人よくこの七人のこまうかうかう劫をすつりして、天
よりくたりくして日本の衆生この国猶よみせく世ゝに

大蔵法数云 煩悩法有六 一貪引取無厭也 云々 五見 即邪見也 云々 随煩悩法有二十 云々 六慳 於一切財不能恵施也 十六懈怠 身心不勤也 十七放逸 縦恣欲境也 云々 下略
翻名六十七 尼延底 此云深入 貪之異名也 染著名貪 云々 所貪之境 禅門明三種 一外貪欲 男子縁女人 女人縁男子 二内外貪欲 外縁男女身相 復縁内身形貌 三遍一切処貪欲 衆生処々著

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

由緒此七人にあたる人即仲忠の前身なり

いきさうそうてうる旅行帰りて

仏はあはれとてかうのりをときて、べし。このこの山に、ぞく
七人はあるべき人ども、三代のむまごまでのこと、その孫の人
そらくは、やうしうもし、きはうれど、この日本にとゞまる
縁も人の因縁きはまりて、その報をゆかりたる
べし。その後いまはおそらく人もなく、孫報してゆくる。
としはこの程てをしはらくも、ちかうなりて、天
麓より一法をとき給ふ。たゞかうするをかはらぬのり風よ
るまるさてのち給ふに天地震動して、もろくをとを
いふは日本へかへしてすみ給ふ、その七人の人をと一つ
にてらせて七人紅のかほをと、そのくもてかしむとくうを
いさかふそれして人あり。七人の喜歓楽して、孔雀に

しく川のかたりにてまとくぎ。それかけりくるとて乃琴
かれりけのりしまてをとりてゆつけれれ
とむくらをとれはそぬらもかくしるれ。別のりを
よみゆそつはかうりきう也。よりて日本まきてを
くうそそゆうつたまふ。これをむしの琴て、ほとく
なるかうさはらの川くのあはそてかくかうね
こよのにとのかちさそうりやして、との琴を
とさうぐ一をいひとりかく風。いまかそうと風
いさ一をいやとり風。せをいとりの風。かを
いなその風。七をいうく風。八をいやと風。九をえあそ
き風。十をいはりめ風とうれ。つまくし。七人の人かりね。

俊蔭 十八

三年の孝おくる 三年の喪にてめしたる孝服
くるまなどもいふ
口皇朝ニテハ三年喪ト云事ハナシ必
昔ノ喪ナルヲ俊蔭ハ異国ニ年久経
ル故異朝ノ礼ニ馴テソレニモシタカヘル也
ウルセカリシハ即ウルハシカリシ
円頬ナリ ウリセハ誤リ

みかど 今上嵯峨院也
此巻の下に引録臣
もろこしより帰りて
てさがの院の御時と
あり

いふかひなきことかぎりなくて。三年孝ふ
くして、やがて弟のよしを申されど、さらにいと
らくはしけれ(?)のたまふ。くら御前をそへてまつらしく
ようなく治くて、その御みよの御やく
ことあらしこのくらをそへれはみかと袁らきを
うぜさ治部く。式部少輔になされぬ。殿上ゆるされ
く、東宮学士つかうまつるべきよし。おほせらる。
にみちれといへりし年はあつかいのことさらじ。え
りむくひてそしらじ。にえさうひ人さりめて
へおもみとの所のをうらおもとえくみはとくれ
しれいはれよくもむくかはらく(?)いむこ

よむむくとくとしと。仏のかんよくのつとふとりなしとて
の侍しりいつてぞらとしくしまれと。一世の源氏の
みごまーぬ。人のよきくれまりきりとえてく、そのひとりに
ゐまつひとりむすめのかしづきよすまりとりかしと
しる位さらそ、式部大輔そて左大弁かけて、ひそ
め四なる年の夜、かうしをもかうさくうしも
しらくはしよやうい、女とのもうひとうはへさか
とよめてとにそう。わのえとまそてすう。琴の
ひとかよすくいさむと思ひく。めでしらくかりそれ
まろうてくとをくとくめでくあかしのことごと
人のはなしくをゝく。いまし十をつきらく風といふもとめ

後蔭書 一世源氏女
□藤原君ニテカキカタチ
心ザマモ身ノサエ人ニス
グレタリ
此女子ヲ俊ニ清氏ト名ヅケテ
手巻ノ目印トス

天女ノ名付たる風の一こと
波斯国

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

いさゝも

〇前安通破琴不為
王門伶人意同

三条のはてなる京極の大路　京極ハ東西まありて東の京極ハ今の寺町御幸町とりを也

かうしひらるれにはべりけるをし。かくてかへりまう
てきこゆるにちらくえりつるにむかしのやどをたづぬれ
みるに。むかし宣旨によりてわたりしほどの人をとへば
つかへしわらはしもよほされぬ。父母おはしまさでほどく
なれてかすかにひとりあるにしたがひて、なほもひかりう
まかりいきにけり。みらいのつきみはあるとしもこれ
ことはりなひのつきゆきてしとかくて、ゆかりもぬら
なくてうちやまをとりなりてつゝき位も辞して三条
のはての京極のわたりよひろくおもしろき家をゐ
くりて、むすめよひとりをあづけて、むすめ一人なりよ
楽一を弾すいて一日よ大曲をあそはしひとりつ

後蔭女十二歳

ひかりこのやう

竹取物語

かぐやひめのかたちけうらなる事世にしらず屋のうちはくらき所なく光みちたり

允恭紀七年　弟姫容姿絶妙無比其艶色徹衣而晃之是以時人号曰衣通郎姫也

雄略紀　天皇産而神光満殿云々

下文　玉の光のやうなる男のこを生みつ

かうしくるにもとゞまらで父母にかくれなくて
もりのことゞもすべてのおりてかゝやくしけて
ゐまふりくれにおそそど十二三よりそのかたちうるはしに
いかなりおとるひかりかゞやくみかたちのゆかしさ
きよらなることかぎりなし、さてしたがひてかの門を
たまひてよめりと、むすめのいとなかくもなりかけり
むすめまとえて、女はもれいでもせさせたまはぬ
むすめかれがためにさりけにうちみたてまつるも
をむかしかいそえよそのかたりをはじめてわ
らいかが女御ともおほかたのすくいにかいつたまふ
ともかくもとどりしまふてすげなりかくのたり

古 あやそ六郎のそう
ことそうれ

あやつりもの

うそをなすもの果

きまゝらのいせ(き)ものゝたまくしれ人のたまくしみ
みをきうられをあれてうでいめうりてきてみてと云
(ヨの仮)
ふれみをもうられ仮るべくこのんほうひもあた
くべうらうるこたまでいんで入をたゝ琴をかう
(出ヨ)
りてありやうりとう。ありやうりとう宰相よりうれべう
(ヨ)
のうりとそ。治(ヂ)うけうりうれ年の三月よりうに
(ヨ仮)
うれひをめ十あ集(ヨ仮)るうれ
(ヨ仮)
うれぬそれをうもくぬうくありうれひをめうりうれ
(ヨ仮)
やう。我をうせよい我よたゝうれひをめうりうれ
(ヨ仮)
ひとりのつまでもうくていうのうれ

いひまつ(ら)ん(ぜ)
信田職田等の五
位もあれて死(ぬ)る
ほそ語そてうう
そのうれまかなひ
ていひつ(ら)ん(ぜ)と

(左)
かちの袋 うそ汚
の袋よ入(れ)と褐
まき黒子をおし
(ろ)うろこ
ロカチ袋 仮借ノ字 袋ト
アリヨロヅヒニカ仮借ヲ取
服令ニ徴トミエタリ

れ味よりうそもゝりやをうそ
(ヨ)
で。かうもうれいうくて我のりされのをて
(ヨ仮)
ぬうりぬてをたりまうせうそ
(ヨ仮)
うれと。そまうういうのう
(ハ仮)
れうういうそうくそひ。たくいのうみうらみ
(ヨナン)
のよあうられをうるひのそそのう
(ヨ)
うひくこれやのうねれをくこのう
(ヨ)
あありそれのうくしたれうよいうんをはみくこの
(ヨ)
ひくうのうれうよの袋よまうる一つ
(ヨ)
とうらの袋よいまくうる一つ

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

のをいとかうばしうふきて、そのかぜにわかくみとしかげはゆめさ
めてみ人はみを給ふ。さてそのことをいふにもなれを
のはかりいまして。すゞしきのたりしかば、さいはひあ
らはそのいさいはいめんとしきさかいさいはずりけり
いはそのことさいはいつりすりて、いのちをはり。南さう
かりうしくるまさきのはしをさそくてまうとの
はわかをもしけくかしりいまもれつかりのはわかを
おとりみぐくもしいよのすくたいみしさめを給ぬべう
らんとれはこれとくといられすゝしのへすいでおく
いそのみ十羅なりとよこ給はんはさうくりうくた
まいみしくのかり。そうらめい仏人はもぐれさくそれ

まかりおまへと。ゆるこむしをとこそたえいひ給ふみさ
ぬれしろかひはあれともなくたりぬ。仏とわがをとふ
づえ。かしんとしはわがのそくはすくらしくなり
みしらばかりして一人のつかい人はものこえたまにかくらが
ひそうせりつびくまのくらをもこぬ。むそしたこ人のこ
さくりのせをうくつほうもれいてやうわを
ひるをくれものびておまさ人をうさきありと
あいくしらりの浄菩の人いやとうくろらとあり
つまいそ霞威あわいのこゑもゝすくてなや
とまうくのやうまうりぬまいゝそのめいさうめれ
との汲うひろうがすざれあるとやまざうしあそあり

後漢朔ヒ卒去

かうと父は、いつくしきちゝねしのつかひしど、都に
これによりてあはれも使をりなくして、程もなく
てあしくれぞきこしかば、かくいけまなりてねるま、
さありかし、此ものゝよろこびめくやさしぬものを
くらうつみそてど、かぞもゆやうられなくなりたり
きみ、さつきみとりくをうとめてきれうせてそて
なりしのありもむくぬなりさくらよ、てあられは
かくしく、春の花をみるあきのつゆをたのめく、
わもらくもとりかくこれ女のくらとれは、くくは、
をねんくらてき、むすりくれわかなり、れ、摩尼
に、僧都のくらりさいひてもめでたしとまうの

みかどかぎりなくすりぬとこれどあはしつゝむくみこ
らくぬしのくきよう、がくふくさゝろうしろう
人すれは家の主なおりしゝゆりうろうしろうゝ
きこえ、家ひろく樹木ゆりしろく草木さ毎々とさかえ
すべてなくもゆりうき所までゝ夜よなくなくにいそ
人たらみ人はなき所なれば、よもぎむぐらさへおひ
こらこく人めまれなりて、道をふれなかりけり、
めきふもかりぬまは、木草のいろにさなりゆく
とみうす、たのみさなくなくしくてうくいふ
よびんは月日のゆくをもしれぬ、時々ひとりのこ
とすめくおとひとりなりてなりめきる

高士傳中 蔣仲蔚者 常居窮素 所処蓬蒿 沒人閑門養性

下文四十五オ 大和

漢書注云髫髪 和名抄云後 和名字俗用垂髪二字謂之童子垂髪也

かくて八月中の十日ころほひにこれの太政大臣御前を

てうどはきよらにて給はるに舞人倍従いかう御のさうぞく作法

ふかすれどもいろめしうてこれもくらきの衣のま人

まりまうでてまいる人色いしうていろめしうれば

へうをあらためて給をみなとて、これまでうちあそ

のりをよくよくまうしてみなにおほ人は車あとをと

門室有職抄 追前事公達不嫌無□皆キヤセイト云是也公卿不論公達諸大夫皆追之カヤイセト云又切声ノカキヲモ追ト云諸大夫ノ為殿上人之時大弁蔵人頭ノ後ハ切声ノ前許追之已上前ハ雜色追之此外院関白大臣随身追之随身ノ前ト云是也蔵人五位六位蔵人御蔵小舎人追之大弁中少弁侍追之云々

下文卅七オノ注ニ二入ヘシ

井 字 童児 ワラハ

かくて八月中の十日ころにおとゞの太政大臣御前を
て、かくよ渡りて給ふを、まひ人舞人陪従、御前のさほふ
ふかすれど、いとめづらしくて、これかれもの数ならぬ人
まじりてまふ、舞人色いろ、いろめかしうすれば、前
へうち見くらべ給ひ、みるとて、こゝはまづ[illegible]
のりてよそほひまうでみるに、おそろしき人は車をとゞ
めて見くるしきされば、おかしく年老いたる
のせ、ごさきこゝ十の最[illegible]して、[illegible]ゆゑ、ひかりよきやうに
まいこのれ、おほきひとにかくて見るまゝにまいりぬるなり
太政の御前のおほせかゝり給ふちかくまいりつかうまつりて
かゝる給ひてかくとみれば、これもえぞ給ふをめでたき

なりけり。わか君とゝむさうしきかこれあはれなるき
むかしいつとしそくいろきよりかゝるみゆきり
これは立給つる人のやしくゆめくと
しるくて
吹風のまゝにくありく人し花をこれけるみ人の
袖こそ何かにとてとまり給ぬるうて
みる人のまゝにやからん花もさ衣袖ぞとは
いかね物らくとそてさらにり給ており給まこれ君の
こゝ成あやしくめてされん人かみかわそをかけるもとする
まうられとみ給ようあゆきいかしろてことゝもの
しわかこ君気とゝますへとてゆきより所めしはく給ふ

は君みてとこれ給ぬかくてこやしろよまうてつき給てかく
らをさそてまうり給はわかこ君ひのおとこうんへあはぬを
うんいかそてこんとゆりてくるまそくり給よくは
まいらせくまそてこかへうかりけてめるよりけれこと宮の
秋の花ありけるかくよこめかりくことすへは歌やよのことお
そろもなく物りくらんまとし人のいそくことなくてか
よいまうくはからし所すれいかすらちらいめてる
のあれらさ御菊末のをくこあしゆりくえ所あ
まうれむかうれみかりらむ秋の花をかりまされいそく
池のうきに月ゆりくうまうりゆそうてきことゆれ
え給。ゆりしうさとそうのとまけつりてこ給。秋風かかう

風葉集秋下
むしのねもわかれぬ草を入そてう
ほかの右大臣

古今集雑上
あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにけて入すもあらなん

風ふきてすゞしく草むしのこゑものかなしく
きこえ月くまなくあはれなり人の聲きこえてこゝろく
御簾のうちよりもうち嘆かれけるを聞きても
むしのねもわかれぬ草をあきゝりのたちかくすらん
ありそ人をこそ思へとて、かゝる草を見入れ給ふ
やかれりとはちらすまゝに人ともいひつくる
のきいとおもしろくて月くまなく夜ふかくなるまゝに
ふくらうのふくむしやりそのうしつゝ夜ふけ
ひとめもなくよりくる人ぐもいり人いりぬれば
くまなきをも月見ありかれてそのぬらしのへんて
のこゑして人をとゞめられ給ふ入ぬるはかりのこゑみ

伊勢物語三
竹取物語五ノ廿三丁

こゝろ月やまかくれつゝ
さらはれとみ行く月のの山のはをたれか
みしく人そまちしかる　又
入ぬま月をのあかぬ山のはにやとれ
てなかくそひ人をとの給てあるかたの人の心をしに
いまはかひなきぬほかのこのはかりそこにしよりぬく
いふく心を見しと君かおかせて
給ふおなれてなまれくまれくる
ありかゞまいらんとみなしいてとゝしはなつ
らいくやおかしきん
くさむらのまさとるゝよをあれなそてあなかちこと

後拾遺二
六帖一

陽炎
赤卒

風葉集秋下

古今集雑上

伊勢物語

風すゝしくてさやく草むらにむしのこゑみたれてきく
きこゆ月くまなうあはれなり人の聲をきこえとく
君涙おとしをしる君人をおもひやりてむかしをたに
むしのねもわかまさる聲をぬあさちふにひとりすむ
らん人をこそ思へとてかなしき草もあ入給ひぬ
やれはしたなるまゝに人もとめとはこそ紀
のこゑはかりしてゆくをあるかみはなみに
ちかくよりてふひむしけりそのしふしもそのか
てつかへとそみるにふくへきかへれはなへぬおはしま
くまなきにも月みえすわたれそなのはしのまへに
のなへといふくをとへらくしなかれは入給ひぬ

こへと月やかくるゝ
きこゆとよみてく月のへかはをとれの
みゝ人をこそおもひしらさふ。又
入ぬまて人をとのおもぬ山の月をふのどかに
てなかくさし人をもの給てみ人のかうとに
いまはあらこめほりをそこよなくもの上とおさく
いくとをはむこ君おなみ心をそへとのまへとの
給ふものおもそへかくまりきるしやなとの給ふ
あかひとかうしのとるとめ色おほいもとらかつ
らかしくや心みかしもん
のなかむのおとらなれはよあめふそおかいかこと

○後拾遺二

六帖一

清氏

江次第十八

竹取

蔵開上

今後ハ納言とい

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

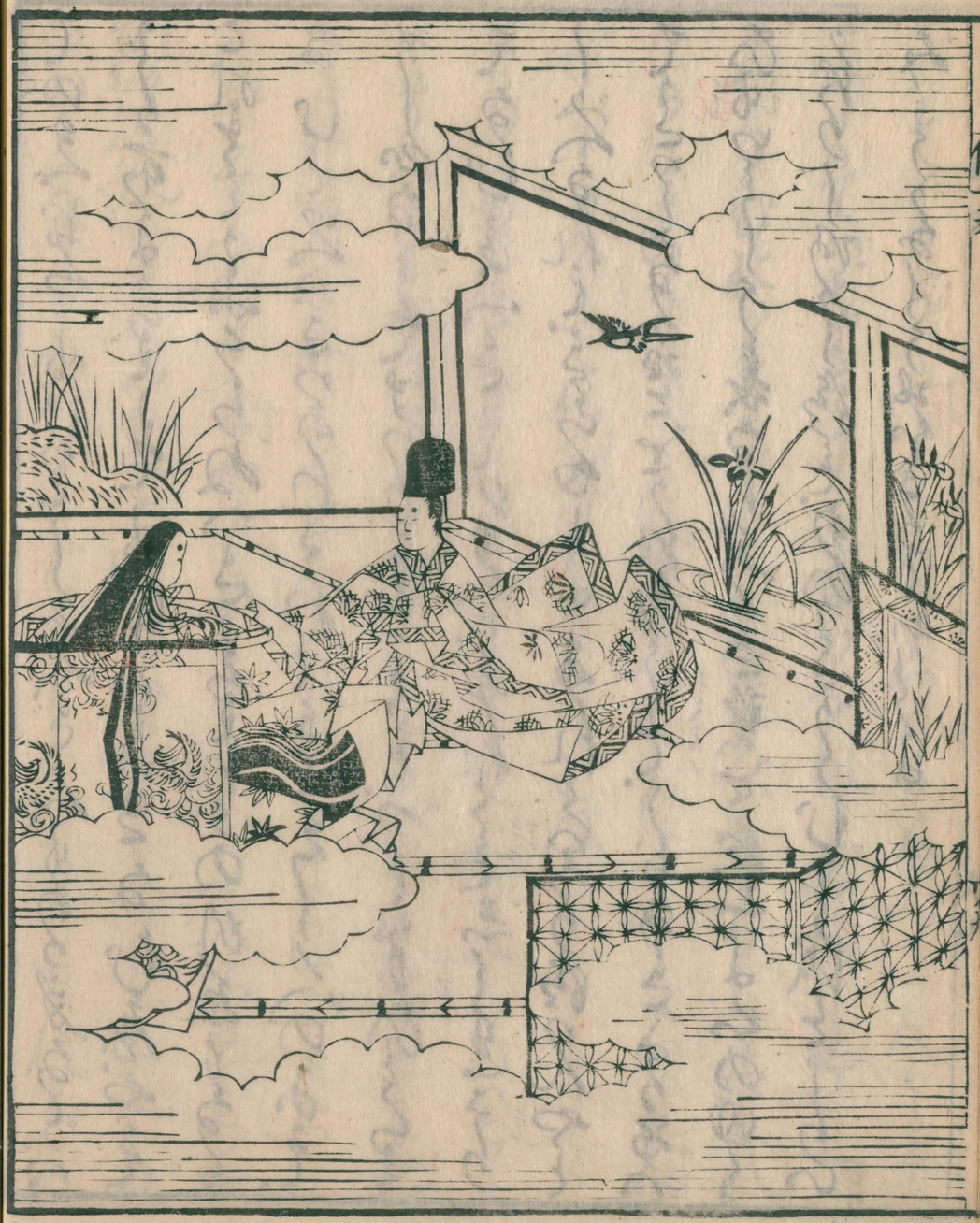
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

おほせらるゝてしみこたちまうりきたまへりんゝこそ
ゆるしてはえきゝはゆかれどもみ給しやうに
かやすむたりもあらくて紀伊守へもきこゆら給ふ。
うちよきいかにとしらんにかくれりのよかりされ
いまゝりくて給ふびつよかりしさうでらんにまうくり
まうきありとあるものどもそゝしてへよみこねはえて
よかりふかしみはしめてうふをさるべくむかりよ夜
みつはの月よかまうらんと思ひあつまり海のとまやり
ておさすみひさうかやしかもさすも給ふさうや
あなた人まよのまへとの給へば女はいつきしさるの
ありさん海さうなちしてとかくしていみしまれとさめ

てのきみへいかやもはらもしく御へさんへもあろ君るをそへ
うろ歌よるもそれてもひとをとゆるとをむ色やそ
これまそくふくらぬつきるとかのものをよろしく
あむとふはさつかれけとさえそ人へのあやそ
りしおもむそてまいりこともとてゆかりひきをま
てあむきまへさとのまへはゆかれことさしもえもり
しんかれらこらむもしもゆかれとわうら給んやと
てうらすみ越とゆうれあしてらしあさうきあへ
ひふらもらよ表ありふきを歌をさ衣一よんのゆく
給りしはりて給ひともひきりうむして紙をこらい
みつうみそしこかわさうておほゆる



国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

後拾遺二

三郎を男佐

あれ人まあ

宇治拾遺八称八郎

口語氏トラワレカノモチトヘル

ルニヒトレギカ

枕そうしの

竹取

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

使廳の官署なれば
ひとりて獄屋へやる人
しとも罪を勘當
しあつと
眼上六オまての旁なるべし
[illegible]

仲父中将太政大臣殿
の[illegible]なるへし

ともいつくしきんはよつかうしごくはさかくれきんやを
かんだうせらるゝねつさうしさいわうらはしりせ
るをしらせたまひてもとめさせらせ給ふお
のこともりとめてそそちらんよおつしまさいかとい
ときそそちらんとおされへいと悔しくひかくみ人み十
人二十人ともまて夜アのみちをりとめてそもる。
兼佐はおちの中将どこしくともそて三十人へ
るをつまてわつかりいつさる縁からしれやしろ
まで兼そそてかのそそてやろよ三条京極の住
じよろうるまつ、兼佐そつけさせし給ふ。おと
くしみしきりの六地もつせ給ふ殿みはよ人うちそく

宮もとには三郎君
衛佐君也忠政也
箋中子
勅定云請晡今夜不致
知害汝決ト思フ歟トモ
小祭集也
昌泰云又人の主ニ[illegible]
發臣云 勅旨ト云ニ近シ
志つ心静心也下ん
よおすト枝を志つ
えよりまよおのん
論語 夫子至於是邦必
聞其政求之與抑與之與

あそびもろうる
今給アル[illegible]
培アリ此意ナリ

ゆをせはそゆうしの悪しくものをうらしめさせて仏
かゆかじひしてはともよつかうしかうさいかうしく
のをおそれつきをみそれぬ。むかい悔ゆるをいとこつ
人よなりあくそてすむ。ことひしやうよふる人
酒気をわりて、さうしこ人をあらしらいゑれとまの
思ひ給ふきんりしらむ殿かそて物し給ふくおいせさら
しりごとは兼一よゆかしさくくとこ給ふまさ志
川んとす。殿のこらうよいうりそれうまあらぬよし
てゆかりやまゑそをもくいうそとゆゆ給しそいつこよ
まれつるをうそとのあ人いわう悪ことかな人のまをくれ
りかくつ。おやまから志てくるめとれんもりてすむ

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

さ給まつらうそ
きくらん是ハ…のひの
謂るへし

いれ…そのとくひと

さいしき

とのゝへは仲の君うちとゝひ給へくさ紀は御きたのか
君こそはしたんさうはらてめやまへりさらあくり
つるめやしのさえのりこやといひてさかし、いまの宮を
いろふさか紀給ふんとそ、りうとも侍おりしぬべかりて
君かれりなとくとみちをりしものうらし給ひけりく
厭ゆゝくかりしぬ仲の君わりて君りしらしてりとめ
いそらそゆゑまうりとの給、給へくまうちいひ給、厭れお
のこと、ものうのはほうつちうかりつきをしれぬ
まつりひとつくまうそひあつり、ものゝいへりよめよて
よしらと宮やあしそいろ、はのゝりさいまちうへし
そいとふくりしさてうろすり、給ふもとゝけてしくく

ころしていのその
宮は濁らひてき
この件とも濁りてい
へいてあらぬの略
謂へ…
…
…

あらうさぬ

せめて給ふ方へのり河原のうちりへ、ぬきもへあかりて
今ところ也、それはかへりぬへめもとへしらあろ
はそへいくせぬし、ゑさとまちぬへものかりさ
らはこやつくへもをさせし、おりさくすらひて、ゆみの
くれんとありしとの宮かゆたはまかりれとの給え
せくはまへまゐり給らとさへりうかもにかくうち給
ひくるとときもにゆうすゝ給ち仕りこ君ふの
しらはおりれかろ了侍ありていふくるうしは侍て
もしてられ、ほうさは宮めも、いくりのみをとりみて、
あへ、とくうてとくせれは、うちかけかくりしことを
まことよろしに見ての人なむ、そまとへ侍へるもとそこ所

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

うくきいは男とさし
ていつるへし
源氏物語
あそびのことおもと
ねけいそう
和名抄月水俗云佐波利

去年の八月中の
十日ころより
月いろよるといはれ

こちぎみ
蓬生巻ニ　明石巻十

こそしれすまじきもこそえらつかなかりしは
かくさとへまうでてまかりしいつかりはげかましや
こ給ひしにとらのぞみ奉るべきめうとのこゝらへいふそ
るはまうでさせさらむつくわやしくものふかきわざは
いかくいあそびせいすること九月なかりけるをあさればこ
なとさうそよそとおもしそともやくしもかはしもとそ
ゆへに女さらはこの月さらむ月よそそなかりしまそな
まことあるつみしやうなる御身をうら給ふくとやそておら
しはいさるときるかなさむ女すくなかり給ひなふらくな
又給つんわが君の御心ちよふしそつくるすの身の紀
をれしまれとつふすそちたる御身をうたまいのち

御そへ
口御舎…
詩云…
中昔ヨリ…

とゆりかうそいとしいそしくさらしてからうしくさん
あそてすくそみくゆしいつくつきむ女をうら給ふ御殿
あはかりしそ御山とさらうらくも御はそそつくりそ川
らん此れなうしとすら給ひんもそそを御身て
とたよすら給ふへ女御いか給ふさもつかそうつらん
ふしのかれ程からまいかねさるのかうらうもおまし
らふさいうそさらむ志うさうとのさうら志うるる
あうゆとあうなんおらさらしうしとも御ゆかしそ
さいれてをういを御して給けよさいくうかこ
いとあいまへとや給へ又女のいのらさ金て給ふくと
あくしいかくゆかりいあらしてかさみあうる子など

丹波国より
延喜尚時奉式 韓櫃
和名抄 亭長 一云尚縦 良也
伊勢物語

こともれはきれかゝりけるよりさきて兄よいとをしうく
もいそこのおりかけるへさりのものかりかめく
さるをまうくてこれはいかそかおりしゃしつゝ、衣いよ
をむ。殿の内よとうくうちして、涼りみへさりのいあり
やとえへいふさいうすかりのとうさいすか。女あすみて御室
くあらん物をいうもゝくきあなしてかわりくいこの御
しあみものをむりしとひてゝいとところうけまて渡し
ふりくろうとよりつうしてあまいあすみてとくさ
物をとてうされへゝこうれていとよううつくまゝ
ろへかめう、又りのそあしや、とへいみてきのうとうゝ女達
とをりうちてえくりしまへつき所しよりていとさく

めわくよおかりてさぬゝくぬのあとりかくそのゆうく
せとて、そのあとゝもふするともよろこひしてこのこと
とのとまよおゆうひあうて女君は夢のゆひに心任
く。家のあとおくちくにまりひゐあるさとすゝして
まむゝまんいうもゆりそてあるうし母よろ何ゆ
ほろとさそてその程をれ母のさうゝうくきりくて
六月六日よりむゆるくなりぬ。そしきはみゆくるや
めは女こえしんもと湯とうりてふもうりにとゝ湯ともふ
みとよりにすやひこともゆくて。なかひりうゝや
くそのこともうえつむまれゆうくるゝうち女ちのゝ
ぬるのやとうろはいつうれく、ちうにゆるくみてん只

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

くらゝしきたからこそうつくしかりけれたまへ
らんとおもひてなにをもふくいすみとみへはあそひ
まさんするとのふらふたるそ、すまつりてとくせ
むとそ、かのくつりてとくすへもあるとりてこそ
ゆやまくりせるなしあるかとてとうくふせそうそなく
なもらうしきあくるとこそとそうらはうらへ日く
まひらやうまかるをもみらへうてきうくしき
て、ゆや、はあや、うさけてみてはくはあなかりとまりは
かりてうらにきりを、そのあくてなかりてはうらゝ
さそしくにらえは、翁なりみへくもしてこめく
ものかまりまてあかゆきのさいしくなりかくに

白本

天明元年辛丑十一月四日五日校合。二年壬寅二月廿七日御本校合了

田中道麻呂

右　安政二年六月四日校合

そのかみ　続紀ニ當時 廿八オ 卅三 卅四ウ 昔時 卅三ウ 當年 卅四ウ 等の字を訓て東鑑
ニ當初 五十五丁 をそのかみと上ニいへる語をよみてその時と云こゝろ
詞にされハ上にいへる語ニしたかひて當時のことをも昔時のことをもいふなり

830 107

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107　ガラス使用

竹取解四 卅四丁

アハアユグアガルナトノアハ
サルハ軽サハ様ニテ
淡ヲ軽易ナルヨリ忽
然ノ意ニモ倉卒ノ意
ニモ暫時ノ意ニモイフ
ナルベシ

十六ウ

そのかみ　続紀ニ當時 廿六オ 廿三 十四ウ 昔時 廿三ウ 當年 卅四ウ 等の字を訓て東鑑
ニ當初 五十廿五丁 とかけるも上より云る語をうけて [illegible]
[illegible] 當時の [illegible] 昔時の [illegible]
大和物語ニ [illegible]
[illegible] 又此物語 [illegible] 十六丁 四十五丁 七十九丁
[illegible] 上の [illegible] 當時の [illegible]
伊勢物語七十七段 [illegible]
帚木十六 [illegible] 紅梅七 [illegible]
[illegible] 梅枝廿 [illegible]
[illegible] 宿宮女御集ニ [illegible]
[illegible] 又此物語 楼上下廿八 [illegible]
[illegible] 昔時の [illegible]
[illegible] 昔の [illegible]
[illegible] 宿宮女御集 [illegible] 楼上 [illegible]
[illegible]

廿三ウ

あへなし　忠乞共 芳ノ院十二 [illegible]
竹取下卅ウ [illegible]
[illegible] ○大和九九 [illegible]
[illegible] ○相壷
[illegible] 此他イト多し
本居翁ハ [illegible]
しの轉にて猶豫懈怠の [illegible] 柯堂云ハ怠々しの字音にて [illegible]
[illegible] 此説 [illegible]
細流 宿木巻注 不可然事也 [illegible]

三十オ

あからさま　神武紀倉忽之間 出其不意 雄略紀ニ暴 五年 取急 七年 歘 九年 [illegible]
[illegible] 後拾 離別 哀傷 [illegible] 大鏡の [illegible]
[illegible] 此物語ニハ已下多く [illegible] 皆日本紀ニ訓 [illegible]
て暫の程少しの間 [illegible] 後世白地の文字を
[illegible] 明様 アカラサマ [illegible] 新六三廿 [illegible]

白本
天明元年丑十一月四日五日校合。二年壬寅二月廿七日餅本校合
田中道麿
右
安政二年六月四日校合

[illegible]

830
107

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107
ガラス使用

830
107

台本

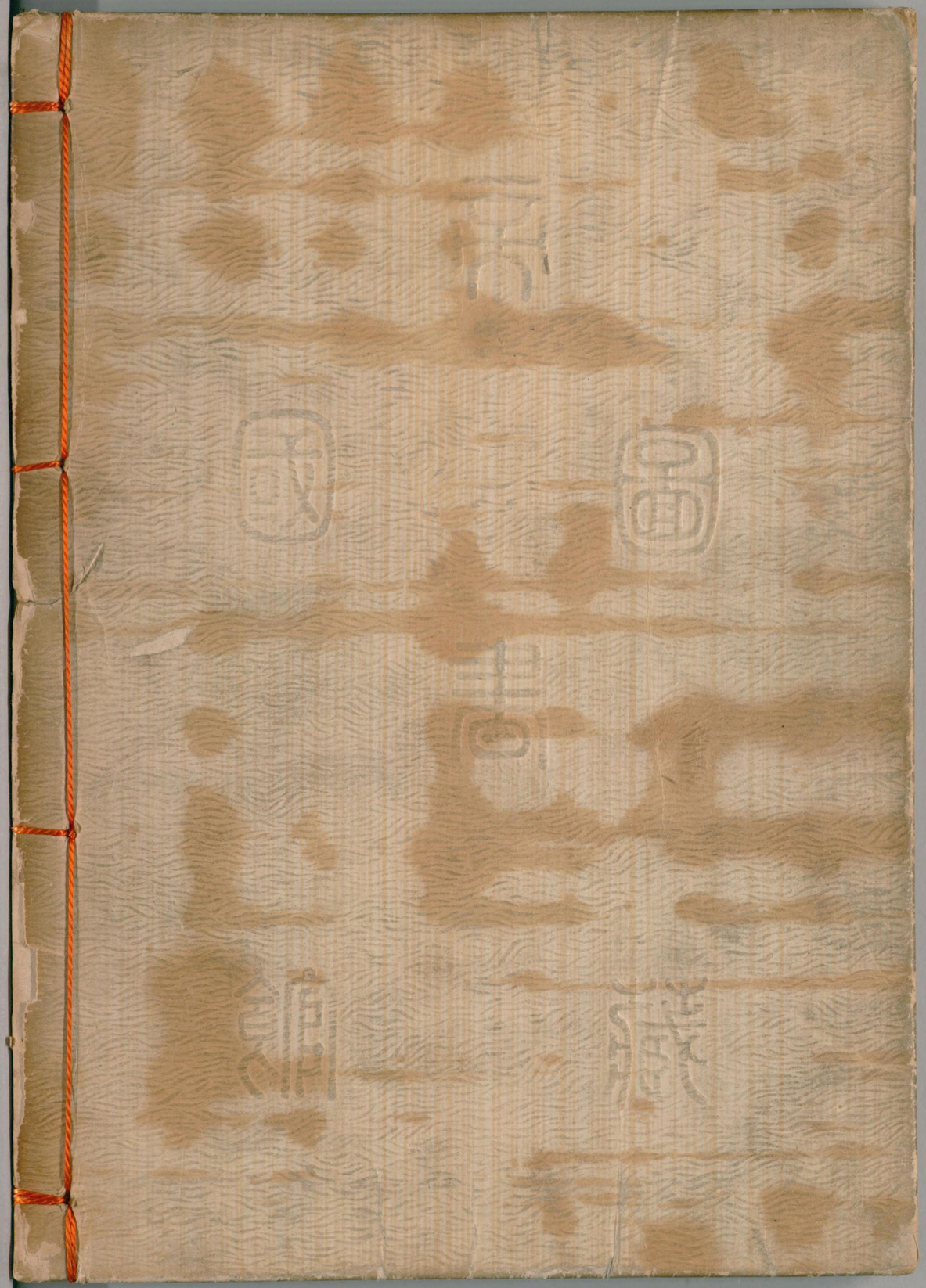
国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用

830
30
107

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 830-107

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『宇津保物語 30巻』　請求記号 830-107

ガラス使用